

新 おおさか KEYワード 【第1回】

大阪市を見守って一世紀 西欧に倣っても気持ちは聖なる守護神

難波橋のライオン像についてテレビ番組で話すことがあった。大正4(1915)年に市電を通すために難波橋は架橋され、当初は「大川橋」と呼ばれたが、北詰と南詰に4体のライオン像が置かれた。兩岸に鎮座しますライオンは何ものか。

明治36(1903)年に天王寺公園で開催された第5回内国勲業博覧会を見ると理由が分かってくる。ヨーロッパに行くと、人が集まる広場には彫像や噴水が設けられているが、日本も近代化を進める上で、西欧の都市を模倣したのである。第5回内国博でも、正門前や会場内の美術館の前に彫刻がある噴水が設けられた。

ただ、正門前の噴水の写真(図1)をご覧ください。よく見ると

少し奇妙である。天を指して真ん中に立つのは龍が巻き付いた剣である。これは不動明王が持っている「俱利伽羅龍」の宝剣ではないか。美術館の前の噴水にも女神らしき像があったが、それも好ん



(図1) 第5回内国勲業博覧会正門前の噴水

で水墨画に描かれた白布をまとった白衣観音であった。

まさに和の匠のテイスト。日本人は西洋の都市を模倣したが、和魂洋才とでもいうか、モチーフを東洋的な題材に置き換えたのである。

第5回内国博の美術館に出品された彫刻もそうだ。写真(図2)の騎馬像は、ルネッサンスの彫刻家ドナテッロの有名な《ガッタメラータ将軍騎馬像》を思わせるが、服装は頭巾をかぶって日本的である。難波橋のライオン像の作者である彫刻家・天岡均一(1875~1924)が出品した《豊公乗馬像》、つまり太閤豊臣秀吉の像である。日本の彫刻家は、公共空間のために日本の偉人を題材に西洋風の彫像の制作にそしみ、博覧会で世に問うたのである。

こうした文脈が見えてくると、難波橋のライオンも、豪華な橋梁とともに日本の近代化と大阪の街づくりの交点に登場したことがわかる。

明治まで日本でライオンといえば「獅子」のことで、文殊菩薩の乗り物としてや、獅子舞で知られた。しかし、前年の

大正3(1914)年に東京の三越がロンドンのトラファルガー広場の像をモデルにライオン像を铸造したほか、1900年のパリ万博でロシアから贈られ、セヌ川に架かるアレクサンドル3世橋のたもとにあるライオン像を、難波橋のライオンは意識したという説もある。



(図2) 第5回内国勲業博覧会の美術館に出品された騎馬像

また架橋と同じ大正4(1915)年に大阪市立動物園(現・大阪市天王寺動物園)が開園している。天岡は大正5(1916)年、大阪市立動物園が美術家のために、日本初の動物写生室を建設するに際して意見を市に問われた彫刻家だった。

ここでも面白いのがライオン像が口を開いたものと閉じたものがセットになっていることだ。仁王像と同じ「阿吽」(阿形と吽形)であり、アレクサンドル3世橋のライオンと比べ、面差しもどことなく東洋風である。

忘れていたが神社の狛犬にも阿吽がある。名市長の池上四郎(在職1913~1927)が天岡にライオン像を依頼したと考えれば、近代都市建設をめざす大阪市を守る巨大な狛犬としての石像に、先人たちがこめた強い思いが見えてくる。

ただ私としては、100年の歳月を経て少し風化してきたのか、胴体が痩せている気もして、何かと大阪のためにご苦労をおかけしてきましたと、愛猫の背中をなでるように石像の背中をさすりたくなってしまおうのである。

「大阪を知るための100の言葉とモノの世界」を銘打ってきた「おおさかKEYワード」ですが、連載110回を越えましたのでタイトルを少し変えて「新 おおさかKEYワード」となりました。今後ご愛読よろしくお願いたします。

「大阪を知るための100の言葉とモノの世界」を銘打ってきた「おおさかKEYワード」ですが、連載110回を越えましたのでタイトルを少し変えて「新 おおさかKEYワード」となりました。今後ご愛読よろしくお願いたします。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の現像―」(創元社)など。